二次元コードを用いた病理認証機能の導入効果

◎高橋 美咲[1)]、坂野 新[1)]、鈴木 理沙[1)]、金子 章江[1)]
公立置賜総合病院[1)]

【はじめに】近年，病理組織検査の検体取り違えによる医療過誤が大きな問題となっている．当院では，検体取り違え防止対策として 2018 年 9 月から包埋カセットとスライドガラス印字機を導入し，二次元コード管理による認証機能を用いた病理検査の運用を開始したので報告する．

【システムと使用機器】病理支援システム：WebPath（正晃テック），使用機器：マルチレーザーカセットプリンター SIRIUS（武藤化学），パススライドプリンター ESPO（松浪硝子工業）

【運用開始前】検体容器とカセット，スライドガラスに病理番号を手書きで記入し，スライドガラスは染色後に標本ラベルを上から貼っていた．患者画面を開く際は一覧から選択するか病理番号を手入力していた．

【運用開始後】受付：依頼書のオーダーバーコードを用いて受付し，病理番号を発番，同時に二次元コードを印字した検体容器ラベルを出力する．切り出し：容器ラベルを読み込み，カセットを印刷する．容器ラベルとカセットの二次元コードをそれぞれ読み込み，照合したカセットに組織を入れる．薄切：カセットを読み込むことで対応したスライドガラスが自動的に印字される．診断：病理医がスライドガラスの二次元コードと依頼書のオーダーバーコードを照合して当該患者画面を開き，診断を入力する．

【効果】スライドガラスとカセットの準備に要する時間が短縮した．特に薄切時は，薄切作業のみに集中することが可能になった．二次元コードを使用して確実に当該患者画面を展開可能になった．尚，導入以来，二次元コードの誤読は起きていない．

【考察】変更前の運用では検体取り違え対策としてダブルチェックを行っていたが，書き間違いや誤認は少なからず起きており不完全な状態だった．認証機能の導入により確実でスムーズな業務が遂行可能になり，検体取り違えのリスクを減らすのみならず，作業効率の増大と技師の精神的負担の軽減に繋がった．次期病理支援システムでは，各工程担当者の記録や進捗管理等を検討しており，今後も検体取り違え防止対策の更なる充実を図っていきたい．

連絡先：0238-46-5000（内線 3127）